

<Translation> Ma Ling-pang: A Continuation of the Record of Qazaqs' Migrations to Gansu Province, 1 (1, 2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤坂, 恒明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/482">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/482</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 翻訳

### 馬鈴榔「哈薩克入甘続記」第一章第一・二節

Ma Ling-pang: A Continuation of the Record of Qazaqs' Migrations to Gansu Province, 1 (1, 2)

赤坂恒明訳

AKASAKA, Tsuneaki

#### 解説

18世紀中葉におけるジュンガル王国の滅亡の後、有史以来しばしば世界史上に重大な影響を及ぼした内陸ユーラシア騎馬遊牧民集団は、歴史の表舞台から退場するに至った。彼らの活動の場は、ロシア帝国と大清帝国の辺境として位置づけられ、彼ら自身も次第に定住化を余儀なくされ、20世紀には、特に社会主義政権の国家政策のもとで、騎馬遊牧は著しく衰退した。

このような歴史的背景のもとに、20世紀中葉、中華民国の領域内において、二つの騎馬遊牧民集団の大移動が行われ、それぞれ、移動先の地域社会に少なからぬ影響を与えた。

その一つは、内モンゴルにおけるブリヤートの移動である。今日「シェネヘン・ブリヤート sineken buriyad (錫尼河布里亚特)」と呼称される、内モンゴル自治区フルン＝ボイルのブリヤート集団の起源は、20世紀前半にロシア帝国・ソビエト領内から、所謂ツングース・エベンキ集団の一部をも伴い、フルン＝ボイル地方に移住したアガ＝ブリヤート人である。彼らの一部は、日本敗戦後の1946～47年、リンチン＝ドルジ rinčin-dorji の指導下に、広大なシリングル盟を縦断した<sup>1)</sup>。

そして、もう一つが、1930年代から1950年代初めに、新疆省から甘粛省を経て青海省、さらにチベット、カシミールへと移動したカザク Qazaq (哈薩克 / カザフ Kazakh) 諸集団である。彼らについては、日本では松長昭氏によって紹介され<sup>2)</sup>、夙に知られる所となっていたが、松原正毅氏の著書『カザフ遊

牧民の移動』<sup>3)</sup>において詳細に叙述され、彼らに関する我々の知見は格段に拡がった。

この、世界史上における騎馬遊牧民の活動の掉尾を飾る——その実態は、あまりに痛ましく悲惨なものであったが——カザクの移動については、現在に至るまで、数多くの文献がある。

イスタンブールの移住カザク人からの聞き取りに主拠したものとしては、イギリスのライアスによる著述<sup>4)</sup>が初期の文献である。本書は、研究文献としての要素もあるが、むしろ、資料的な分析対象として位置づけられるべきものであろう。その後、移住の当事者たちが自ら語った自伝的記録が現れるが、やはり同様に位置づけられる。なお、彼らをインフォーマントとした、文化人類学の学術著作もある<sup>5)</sup>。

また、中華人民共和国で刊行された民族史・地方史等におけるカザクの移動に関する叙述は、中華民国期の調査報告や定期刊行物に記載された関係記事や、当事者たちからの聞き取り等に基づき、カザクの移動の実態について、比較的詳細な状況を明らかにしている。『新疆哈薩克族遷徙史』<sup>6)</sup>が代表的な著作である。カザフスタンで出版された書籍も、これに準じよう。なお、当事者たちの手になる歴史叙事詩さえ刊行されている<sup>7)</sup>。

カザク側からの視点にほぼ拠っているこれらの文献の多くを通じて、我々は、彼らカザク集団が、おびただしい犠牲者を出し、悲惨きまわりない移動を重ねつつも、民国期軍閥の圧政・弾圧に対して戦い抜いた雄々しい人々、との肯定的な評価——学術的な見方であるとは言い難いが——を、自然、抱

キーワード：ユグル、裕固族、カザフ、甘粛省、中国少数民族問題

Key words : The Yughurs, Yugu zu, The Kazakhs (Qazaqs), Gansu province, problems of ethnic relations in China

くこととなり、このような評価は既にほぼ確立していると言っても過言でなからう。しかし、彼らが一時居住ないし通過した地域は、すべてが無人の曠野であったわけではない。先住の諸集団である、青海省のホシヨード集団を中心とするモンゴル人と、甘肅省の黄ユグル人は、カザクによって甚大な人的・物的損害を被り、地域によっては潰滅的と言い得る程、大きな社会的変容を余儀なくされた。しかし、この歴史事実は、現時点では、必ずしも十分に認識されていない。

言うまでもなく、歴史とは、一方の面のみからでなく、複数の視点から見なければならない。そこで、ここに、カザクの大移動において黄ユグル人が被った影響の一端を記した同時代資料を紹介する。即ち、馬鈴榔「哈薩克入甘統記（カザクの甘肅流入統記）」（月刊『新西北』第七卷第二～五期、1944年）である。そこには、1940年代前半におけるカザク人による黄ユグル人への侵掠の様相が具体的に記されており、中国での学術研究においてしばしば使用され、高い史料価値を持つ。

黄ユグル人は、中国の甘肅省の祁連山北麓一帯を中心に、主に遊牧生活を営み、伝統的にチベット仏教を信奉してきた。「ユグル」は「ウイグル」の転訛と考えられており、黄ユグル人は、20世紀半ば頃までには、ヨーロッパの研究者たちから、古代・中世のウイグル（回鶻、畏吾兒）人の後裔と見做されていた。ちなみに、今日の新疆維吾爾自治区に主に居住するウイグル（維吾爾）人の族名は、20世紀前半に定められた復古的新名称であり、黄ユグル人とは、民族系統上、直接の関係はない<sup>8)</sup>。黄ユグル人の固有民族言語は、モンゴル系の東部裕固語（シラ＝ユグル語、シャラ＝ヨゴル語）と、テュルク系の西部裕固語（サリゲ＝ヨゴル語）という、互いに通じない二つの言語である<sup>9)</sup>。黄ユグル人の族名（自称）は、東部裕固語では「ǰara jowor」、西部裕固語では「sarəy jowur」であり<sup>10)</sup>、いずれも「黄ユグル」の意味である。前近代の黄ユグル人については、日本では佐口透氏による研究がある<sup>11)</sup>。彼らには、中華人民共和国成立後の1953年、「裕固族」という民族名が定められ<sup>12)</sup>、現在、主に甘肅省の肅南裕固族自治県と酒泉市黄泥堡裕固族郷に居住している。

著者 馬鈴榔（Mǎ Líng-bāng）は、四川省合川の出身で、1936年頃、中華民国の重慶政府から官吏として甘肅省に派遣され、蒙蔵委員会の酒泉（河西）調査組の成員として、甘肅省におけるチベット仏教を信奉する諸民族の社会発展のために尽力した<sup>13)</sup>。甘肅地域において自らも関わった民族関係問題に関する著述も少なからず<sup>14)</sup>、貴重な情報を我々に伝えている。

ここに訳出するのは、馬鈴榔「哈薩克入甘統記」第一章「哈薩克と蒙・蔵両族の紛糾」（月刊『新西北』第七卷 第二、三期合刊、中華民国三十三年（1944）、一〇一～一一〇頁）のうち、第一節「東海子事件」と第二節「東海子事件の結着、および、その影響」である。東海子事件とは、中華民国二十八年（1939）10月に発生した、カザク人が黄ユグル人（現在の裕固族）住民を殺害した事件である。

当該の両節は、甘肅省図書館書目参考部編『西北民族宗教史料文摘』甘肅分冊（蘭州、甘肅省図書館、1984年10月）251～252頁に抄録され、鍾進文主編『中国裕固族研究集成』（北京、民族出版社、2001年11月）528～530頁に全文が収録されている。前者（以下、文摘と略す）では、重要な記述が省略され、また、用語等が書き換えられた部分が少なくない。一方、後者（以下、集成と略す）は誤植が多く、脱落もある<sup>15)</sup>。従って、我々は、『新西北』誌に所載の原典に当たる必要がある。

原典では段落が少ないので、訳文では、原典における段落部分は1行分を空け、適宜、改行を施した。また、文中に原語のラテン文字表記を添えた部分もある。

なお、中華民国成立後、チベット地域では、漢人によってチベット人に対して用いられた族称「番」は、「蔵」に置き換えられた。漢人によって「黄番」と称された黄ユグル人は、チベット人ではないが、「蔵」として区分された。よって、民国期には、黄ユグル人は、「五族」の一つである「蔵族」の範疇に入り、本「哈薩克入甘統記」においても、「蔵民」・「蔵族」と呼称されている。「蔵」の概念が、現在とは若干、異なっているので、注意が必要である。

注

- 1) 日本語で読むことができる文献として、例えば、サヤナ・ナムサラエワ「プリヤート人の移動と分断 ディアスポラの軌跡」(赤坂恒明訳。ボルジギン・ブレンサイン編著、赤坂恒明 編集協力『内モンゴルを知るための60章』明石書店、2015.7、pp.338-343)がある。
- 2) 松長昭「イスタンブルのカザフ人」『イスラム世界』46、日本イスラム協会、1996.2、pp.17-33; 松長昭「新疆からイスタンブルに新天地を求めたカザフ人」『アジア遊学』49、勉誠出版、2003.3、pp.81-88.
- 3) 松原正毅『カザフ遊牧民の移動 アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953』平凡社、2011.12. 本書は、平凡社刊行の『月刊百科』に2003年4月から2009年10月まで、ほぼ隔月で連載された「草原の風——遷徙の風景」を「加筆・訂正」した、一般読者向けに書かれた概論的な著述であるが、専門性も高く、学術的な価値を有する。新疆ウイグル自治区アルタイ地区とイスタンブルで行なった聞き取りに主拠し、さらに、刊行物のみならず、大英図書館所蔵のインド政庁文書やトルコ共和国首相府文書館所蔵文書をも利用して著述された本書は、1941年と1951年に相次いでカシミールに移動した二つの新疆カザク集団のうち、先に移動した集団を主要記載対象として、彼らの足取りを、新疆からカシミールへ、さらに、後に移動した集団と合流し、イスタンブルに最終的に移住した後の動向に至るまで、彼らを取り巻く国際環境の推移等をも時代背景として紹介しつつ取り上げており、高い評価を受けている。本書には、学術誌における新刊紹介と書評が複数ある。坂井弘紀〔新刊紹介〕「松原正毅著『カザフ遊牧民の移動：アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953』」(『内陸アジア史研究』第28号、2013.3、pp.159-160); 長沼秀幸〔新刊紹介〕「松原正毅著『カザフ遊牧民の移動——アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953——』」(『史学雑誌』第122編第4号、2013.4、pp.111-112); 小野亮介〔書評〕「松原正毅著『カザフ遊牧民の移動——アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953——』」(『アジア経済』54-4、2013.12、pp.188-192)。小野亮介氏の書評には、後に移動した集団に関する重要な指摘もあるので、是非とも参照されたい。
- 4) Godfrey Lias, *Kazak Exodus. A nation's flight to freedom*. London, Evans Brothers Limited, 1956. 本書では、移住カザク人は、共産主義体制下から自由を求めて英雄的に脱出した人々と評価されるが、その背景には、執筆当時における冷戦下の政治状況がある。
- 5) 例えば、Ingvar Svanberg, *Kazak Refugees in Turkey. A Study of Cultural Persistence and Social Change*. Uppsala, Centre for Multiethnic Research, Uppsala University, 1989.
- 6) 《新疆哈薩克族遷徙史》編写組 編『新疆哈薩克族遷徙史』烏魯木齊, 新疆大学出版社, 1993.12.
- 7) *činyxay-šizay üstirinde (tarixi dastanlar)*. bas redaktor: apetay muqarap uli. 阿排太 編『青藏高原的哈薩克人』北京, 民族出版社, 2008.2.
- 8) 当該の問題について、かつて私は、赤坂恒明「ウイグルをめぐる時間軸からの認識」(『史滴』17号、早稲田大学東洋史懇話会、1995.12、pp.68-73) という小文において概略を述べたことがある。
- 9) 詳しくは、栗林均『「東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』(東京外国語大学、1987.3)、庄垣内正弘「サリグ・ヨグル語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第2巻 世界言語編 中(三省堂、1993.11) pp.99-102)、栗林均「シラ・ユグル語」(『言語学大辞典』第2巻 pp.262-268)等を参照されたい。
- 10) 陳宗振、雷選春 編著『西部裕固語簡志』(北京、民族出版社、1985.10) 2頁。なお、東部裕固語を用いる人々は、西部裕固語を用いる人々を「ハラ=ヨゴル хара жовор」すなわち「黒ユグル」と呼称する。
- 11) 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」(佐口透『新疆民族史研究』吉川弘文館、1986.2、pp.2-51)
- 12) 高自厚「論裕固族源流的兩大支系」(楊進智 主編『裕固族研究論文集』蘭州、蘭州大学出版社、1996.10、pp.46-60) 第八章によると、肅南裕固族自治県の設立の過程において、族名決定をめぐる論争があったという。即ち、人民政府に協力して社会秩序を安定させる上で多大の功績があった、東部(モンゴル系)出身の「大頭目」にして清朝期に「黄番」七族の「総管」を世襲していた安・官布什加 mgon po skyabs は、「撒里維吾爾」という族名を提出した。この族名は、北京の中央人民政府の批准まで受けたが、1953年、自治機構を創建するために開かれた「祁連山各族各廟人士座談会」の席上で、「撒里維吾爾」という族名に、安進潮を代表とする西部(テュルク系)の代表が強く反対し、安進潮が出した対案「裕固」——「裕固爾」から「爾」の字を取り去り、「富裕鞏固」の意味を兼ねる——が採用された。その際、安進潮は、「裕固」の二文字を毛筆で見事に書き上げ、それが族名採用に非常に効果的であったという。

- 13) 馬鈴榔には詩文集『邊塞集』（國民公報社、1940年刊）があり、その巻末に載せられている蕭林「幾句不得不說的話」（一九四〇「三八」節在重慶）に、「作者是四川合川人，旅居甘肅怕已快四年了，當我們過去同事的時候，我知道他是一位耐苦，嚴肅面目樸實的人，」とある。
- 14) 馬鈴榔の著述については、後日、あらためて紹介したい。
- 15) それらの結果、文摘・集成共に、東海子事件が起こった年月日を正しく知ることができない状態となっている。

訳文

馬鈴榔 <sup>カザク</sup>「哈薩克入甘統記」

第一章 <sup>カザク</sup> 哈薩克と蒙・藏兩族の紛糾

第一節 東海子事件

私は「<sup>カザク</sup>哈薩克入甘統記」七章・附録三章を著述したが、記述したところのことは中華民國三十年（1941）九月で書き止めた。

瞬間に双十節<sup>1)</sup>が既に過ぎ、私は、そこで冬着<sup>のし</sup>を脱ぎかけ、繕い、暖室<sup>2)</sup>を整え、余暇になぞらえ、戸を閉ざして書を読んでいた。一日晴朗、測候所の胡君が送ってきた菊に向かいあって座り、遥かに祁連山の雪を望み、陶元亮の“悠然”<sup>3)</sup>の佳趣は無いといえども、暇に乗じて、補い正した「記」と「附録」を見ているのもまた、好ましい時間である。

たまたま東海子の頭目、安立民の兄 安立国がやってきた。私は喜んで彼を上座に招き、慇懃に慰問して言った。

「地方は平安ですか？ 人民は恙ないですか？ 牧畜は繁殖していますか？」

これは、もともと遊牧民への時候の挨拶の決まり言葉であるが、図らずも、安立国の心中に思っていた琴線に触れた。彼は額を擧げて私に告げて言った。

「地方は<sup>4)</sup>哈匪に擾乱され、人民は哈匪に虐殺され、牧畜は哈匪に掠奪されました。これは、東海子の空前未曾有の惨禍です」。

私はこれ聞き、悲しみ悼んだ。そこで「<sup>カザク</sup>哈薩克

入甘統記」を著作し、まず東海子事件について記す。

酒泉・高台兩県の間の一つの游牧区域がある。その地は、東は高台の黒泉附近に至り、西は酒泉の黄泥堡 saray dorvaq / xuanjipu 附近に至り、北は高台の塩池、双井子等と境界を接し、南は酒泉の清水、沙山と隣り合っている<sup>5)</sup>。

東西は約二百余里<sup>6)</sup>、南北は約百余里。中に沙漠が横たわっており、俗に「回回沙窩」と呼ばれる。昔、戦争で回教徒がここに戦禍を避けたことがあり、故に名づけられた、と伝えられている。沙窩とは、流沙の俗名である。

沙窩以西の地を西海子 art xqjzi / fi xqjzi と言い、沙窩以東の地を東海子 undun xqjzi / dun xqjzi と言う。西海子地方には一つの湖沼があり、附近に蓮華寺という寺がある。東海子にも一つの湖沼があり、附近に明海寺という寺がある。故に、両方の地は湖沼に関連づけられて名を得た、と知られる（俗に湖沼を呼称して海子と言う）。

両方の地に居住する遊牧民は、俗に「黄番」と呼称される。近年、明文による命令によって、「番」を改め「藏」と称し、彼等は文書で皆「藏民」と自称するが、その言語は<sup>ウイグル</sup>維吾爾語に関係があり、牧民は互いに「<sup>シラ・ウイグル</sup>錫喇畏吾兒」と呼称する。「<sup>シラ</sup>錫喇<sup>7)</sup>」は黄であり、その意味は「黄回鶻」に近い。（按ずるに、回紇は回鶻と改称し、元・明より以来、訳して畏吾兒と言い、最近、新疆の当局は訳して維吾爾と言う）。

彼等の宗教および一切の風俗は<sup>チベット</sup>西藏人と同じであり、祁連山の藏族が「黒番」と称され、彼等が別に「黄番」と呼ばれるのも、思うに又、理由はあるのである。

彼等らが何時からこの地に牧畜するようになったのか、史書は記載を欠いている。しかし私は多方面からこれを考察し、その梗概を知った。彼等は、酒泉の黄泥堡の一部分の居住民と同族である。同じでないのは、一方が農耕をして一方が牧畜をすることのみである。農耕民は漢人の習俗に次第に同化している。

西海子の牧民は<sup>ホランガト</sup>賀郎噶家（小部落の名称）を主家としており、東海子の牧民は<sup>ヤグラガル</sup>亞拉噶家を主家として

いる<sup>8)</sup>。東海子には牧民六十余戸があり、西海子には牧民四十余戸がある。賀・亜両族の正頭目は皆、祁連山の山地に居住しており、両海子は一つの草灘に連なっており、副頭目を留めて、これを管領させている。

彼等（黄泥堡、両海子、山地の二部の黄番）の自ら述べたことによると、明代に新疆から東に向かい、初めて酒泉附近に居住し、次第に南山に向かって前進した。明代、明海寺の傍らに明海堡を建てて兵を駐屯して鎮撫し、清代もまたこれに因った。

今日まで、城市に近い者（黄泥堡等の地）は農業に従事し、農地に近い者は次第に定住牧畜を知り（両海子地方）、山地に近い者は游牧をしている。

多年の善導を経て、民国二十八年（1939）、西海子の蓮華寺に一つの小学校が設置され、蒙蔵委員会の外部差遣人員によって指導され、中央の補助を受けた。東海子の<sup>ヤグラガル</sup>亜拉噶家の副頭目 安立民は、全部落の力で蓮華寺小学の分校を明海寺の側に設置することを願った。

三十年（1940）九月、私は同僚の盧君と共に、この分校の設立大会に参加した。両部落の重要人物が一堂に欲び集まった。私は次の聯語を贈った。

「南・北山を開拓し而うして教育し、東・西海子の人材を造成す」。

非常に深く後輩に期待をかけたが、図らずも、相隔てること一箇月にして、思いもかけず、一件の残酷事件が発生してしまった。人事の不測が、これほどの事に至るものであろうか？

十月十五日<sup>9)</sup>（陰暦八月二十五日）の早朝、東海子の民衆は、遙かに<sup>カザク</sup>哈薩克約四十人が馬五十余匹を駆り、祁連山の榆木山より奔り出し、東海子の明海寺の東五里の沙灘の上まで逃げ、停留して進まないのを見た。

もろもろの当地の旧例に基づくと、おしなべて外来の見知らぬ客が集団を成して入境すると、その土地の首領は必ず人を派遣して進み赴き問い調べた。

どこから来たのか？ どこへ行くのか？ いかなる目的があるのか？

これはまた、悪人を尋問するという考えである。

二十九年（1939）冬、馬鬃山の一部分の<sup>モンゴル</sup>蒙古人が、<sup>フアリ・ラマ</sup>華来喇嘛 dpa' ris bla ma の徳憑を受けて、この地を経過して東に向かった。彼等は進み赴き問い調べ、蒙民の羊・酒の款待を受け、双方は欲び心が打ち解け合った。

この度、牧人が遠くから来ているのを見て、彼等はまた、かくのごとき見解をなし、明海寺から手近に<sup>ラマ</sup>喇嘛五人、民衆一人を派遣して、進み赴き問い調べた。そして、かれらが遠くに移ることを勧めた。

帳幕の前でこれを観るに至り、ようやく、蒙民ではなく、思いもかけず<sup>カザク</sup>哈薩 xasa<sup>10)</sup> であると知った。幸いにして双方の言語はほぼ通じ、意見を表示できた。

<sup>カザク</sup>哈薩は、もともと山中より馬を強奪して逃走した者であり、蔵民が役所のために偵察することを恐れており、彼らにとって、或いは都合が悪かったかもしれず、そうでなければ、故意にでなくとも消息を漏出されることも、やはり彼らには不利であった。そこで、彼らは六人に言った。

「他に求めるものはない。ただ、我々のために案内をせよ」。

六人は寺に帰ることを求めたが、<sup>カザク</sup>哈薩は、許すと言わず、両手を後ろ手に縛り上げる方式で六人を拉致した。

寺中の人は六人が帰って来ないのを見て、哈匪に拉致されたことを知り、東海子の牧人は大いに驚き、頭目の家で聚議し、十六日、安頭目 立民によって、明海寺の住持 安法台<sup>11)</sup>と共に、安才等、総計十八人を率いて、北に向かって尾行追跡した。

途中で追いついたが、彼等は、左右翼に分かれて包囲することを知らず、しかもまた、前鋒と後援に分かれて敵を制することも知らず、密集して前進し、乱れて無秩序に、平素の競べ馬のようであった。

蔵・哈が一箭の遠さを相隔て、遙かに哈匪四十余人を見て、高い所から下に向かい、前進して、また途中で停止した。手中に所持するのは、ただ銃器と刃器のみであった。

少年にして有為な安才の意見では、先ず二本の銃を放ち（たまたま蔵民の中には、わずかに銃二本があった）、敵人を威嚇し、もし<sup>くだ</sup>降るのであれば下馬して来帰するに違いなく、もし戦うのであれば銃刀

を交わし合うに違いないが、勝負はもとより未だに予測できなかった。

図らずも、鬢髪が白髪混じりの安法台は、慈悲の心を持ち、かつ、激怒した哈匪がその弟子を傷つけるのを恐れたために、安才の行為を制止し、自ら先鋒となり、藏民に命じて一律に下馬させ、各々、袋の中から金銭を出し、言葉や明らかに哈匪に言った。

「私と汝は、平素、怨恨はありません。汝が前進しようと欲するならば、私は何時にも危害を加えません。私の弟子たち六人を釈放して帰してください。私は、汝の路用の費用を援助しましょう」。

哈薩はこれを聞き、初めは憐憫の情がなかったが、但し、言った。

「汝らは我々と共に前進して行き、適当な地点に到れば、我々は汝らの六人を返還する」。

安法台はこれを信じ、従う人たちに命じて、後に付いて行かせた。

或る、四方に沙丘の稜線がある地帯にまで行くと、小児の泣き声が聞こえ、既に帳幕に近いことを知った。哈薩は人々を静粛にさせて入り、その不意を突き、その二本の銃を奪い、その後、縄で人々を別々に縛り上げ、その衣服・履物を剥いだ。

安才はあがいて逃げようと欲した。哈薩は先ず縄で彼を縊り殺した。その後、人々を別々に絞殺し、その再び息を吹き返すのを恐れ、また別々に斧で人々の脳天を撃ち破り、沙でその全身を掩ったが、安法台が年老いているのを憐れみ、彼が必ず死ぬと推量し、斧劈の刑を加えることをしなかった。

夕刻、安法台は蘇生し、精神朦朧で、高台城に到り、役人に報らせた。

事後、この絞殺現場を問い調べたところ、そこは金塔に属していた。当該の県の東山「双古城」の東二十里にして、县城を距ること僅か四十里にあった。ここだけで、十七人の遺体が発見され、安頭目等の殉難地であると判った。

喇嘛等六人について言えば、既に十五日の晩に、夾山で殺されていた。その地は、東海子の北山であり、また、即ち金塔の南山である。

今回の事件で、東海子の死者は全部で二十三人であり、その名前は次の如くである。亞拉噶家の副頭目 安立民、僧徒 郭羅漢<sup>12)</sup>、郭小羅漢、楊班第<sup>13)</sup>、

楊小班第、郭班第、民衆 安才、安応才、索福成、郭成祿、楊生元、楊老四、白天福、白天喜、白雪海、索成秀、白武興、郭老二、楊進才、安天保、白家四十八、安昌華、白小圈頭<sup>14)</sup>。

## 第二節 東海子事件の結着、および、その影響

東海子は安らかで静かな地であり、安立民等は自らの本分を守る人であったが、禍が天から降りかかり、藏族が心を傷めたのみならず、附近の人士もまた、これを嘆き惜しんだ。

安立民の兄 立国は、代表の白武才、郭成福等を率いて酒泉の区域に入り、別々に騎兵第五師および第七区行政專署に対して報告し、ならびに救済、銃器の交付、盗品を返させること、賊を捕えること等の事項を請求した。

甘肅省府は、辺境の民に親身に情けをかけ、救済費の国幣四百六十元を共に交付し（死者一人につき家族は二十元を受け取った）、三十一年（1942）七月に至り、ようやく、現金を受け取る手続きをきちんと処置した。

銃器の交付の件は、藏民は久しく未受領であったが、上方には既に代金交付の考えがあった。

三十一年（1942）十一月、馬鬃山の宝布拉<sup>15)</sup>が哈匪二十二人を殲滅し、駱駝七十五匹を奪回し、そして、その他の物品があった。七区專署は、即ち東海子事件の落着と判断した。

三十一年（1942）夏、安才の弟 安玉は、羊毛を運んで西へ行き、かつて当該の山に到り、みずからの目で、奪回された駱駝と馬を見たことがあったが、皆、東海子の元の物ではなかったもので、藏民等は、この事を東海子事件とは無関係であろうと結論を下した（詳しくは後述する）。

この事件は既に結着を告げたが、その影響を論ずれば、則ち下記のとおりである。

(一) 哈薩の擾乱区域の拡大。前の拉致殺害事件は、僅かに玉門・安西・敦煌の三県および祁連山の紅湾寺の八個家<sup>16)</sup> 一帯に出現したのみであったが、今や既に高台・酒泉地方にまで拡大した。これによって、西は敦煌まで、東は甘州までが、皆、その擾乱区域であり、「金塔」「鼎新」さえもまた事件が発生

したのである。

(二) 蔵民が災禍に遭遇したことによって、進歩を求めた。祁連北麓では、民は日が出れば牧畜し、日が入れば就寝し、外界とは往来が頗る少なく、天真爛漫にして、あたかも「無懷」・「葛天」の民<sup>17)</sup>の如くであった。この二十三人惨殺事件の発生を経て、軍事知識の欠乏で自らを防衛することができず、識字者が甚だ少ないことが、上申書等の公文書を上申するのに、執筆できる人がなく、一つの小事のために数か月も延引し(例えば、家畜を返還することを求めるには牲畜特徴冊を作成する必要があり、現金の受け取りには各家が受領条を準備する必要があった。これは小事といっても、安立国等が城市と郷村を数回、往来して、時を半年、費やした)、現代常識と甚だ異なり、新しい事件に対応することができなかつた。

すべてこれらは、皆、一つ一つ表面化し、自らが古い弊害を改めて進歩を図るのでなければ生存を図ることができないと知った。ちょうど都合良く、「西北幹部訓練団第一辺疆青年訓練班」が酒泉に仮設立され、班の主任の羅怒人、教務長の王徳淦等は、皆、熱心に辺疆の青年を育成し、人員を派遣して山に入り、蔵民の生徒を募集した。往昔には大量の学生が城市に入るとは限らず、この度は例外であった。東海子の頭目 安立民の子 安維嶽、安立国の子 安維峻は、真っ先に呼応した。西海子の宿老の子 郭懷成、郭懷玉は直ちに追隨した。東海子の、訓練を受けることを願う学生二人(註一)、西海子の学生八名、その他の各族は、風聞を耳にし、呼応して到来し、酒泉の三山口の東樂克部<sup>18)</sup>の蔵生 馬生哲等三十九名、五個家<sup>19)</sup>の蔵生 顧彦博等三名、西八個家<sup>20)</sup>の蔵生 讓才郎 \*rams tshe ring等四名、羅爾家<sup>21)</sup>の蔵生 柴婁嘉 tshe lo rgyal 等二名、大頭目家<sup>22)</sup>の三名、亞拉噶家<sup>23)</sup>の柯在雲等二名、賀郎噶家<sup>24)</sup>の四名、その他の蔵生八名を数え、その合計した蔵民の学生は七十五名であった。蔵民が城市に入り訓練を受けることの先蹤<sup>25)</sup>を開き、教育を取り仕切る、および、新入生募集に協力する諸君の力が大きいとは言っても、しかし、知識を求める自衛は蔵民の自覚から出たのであり、やはり軽視すべきことではない。

附註一：東海子で新たに成立した学校では、学生は学校に留まって勉強したので、故に城市に入って訓練を受ける者は、かえって少なかった。

## 訳注

- 1) 十月十日。中華民国の建国記念日。
- 2) 原文は「暖閣」。大きな部屋を仕切って作った、中に暖炉を設けた小部屋。
- 3) 陶潜(陶淵明)の「飲酒詩」における、有名な「菊を采る東籬の下、悠然と南山を見る」による。
- 4) カザクの匪賊。
- 5) 現在の肅南裕固族自治県の飛地である明花区と、それに隣接する酒泉市黄泥堡裕固族郷にあたる地域。テュルク系の西部裕固語が話される地域であるが、明花区の前灘と、黄泥堡の裕固族は、20世紀初頭の時点で既に漢語話者であった。照那斯図(ジョーナスト)編著『東部裕固語簡志』(北京, 民族出版社, 1981.12) p.1; 『西部裕固語簡志』 p.1; 『裕固族簡史』編写組『裕固族簡史』(蘭州, 甘肅人民出版社, 1983.9) pp.6-7; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」pp.28-30。
- 6) 中国で習慣的に使用される計量制度(市制、市用制)の1里は500m。
- 7) 「シラ fəra」は、モンゴル系の東部裕固語で「黄」の意味。
- 8) ホランガト xoraŋgat / xoraŋyat / xuraŋcat とヤグラガル jaylaŋgar / jaylaŋcər は、元来、氏族名であるが、この「賀郎噶家」と「亞拉噶(亞羅格)家」の「家」とは「部落」(オトク)であり、清代の「黄番七族」のうちの二集団である。《肅南裕固族自治県概況》編写組『肅南裕固族自治県概況』(蘭州, 甘肅民族出版社, 1984.8) pp.30-31; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」pp.21-35。両集団の黄ユグル人は、西部裕固語を用いた。『裕固族簡史』pp.6-7; 范玉梅『裕固族』(北京, 民族出版社, 1986.6) p.25; 甘肅省編輯組『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』(蘭州, 甘肅人民出版社, 1987.8) pp.3-4。
- 9) 「十月十五日」を、集成は「十月五日」と、文摘は「民二十九年十月十五日」と、いずれも誤る。文摘は、省略された下文中の「二十九年」を、ここにも係るものと誤認したのであろう。
- 10) 西部裕固語でカザクを「ハサ xasa」と言う。雷選春編著『西部裕固漢詞典』(成都, 四川民族出版社, 1992.7) p.178。「哈薩」という漢字表記は、



西部裕固語の呼称に基づくか。

- 11) 「法台」は西部裕固語で「tərɕi / tʃərɕi / tʃorɕi」(『西部裕固漢詞典』 pp.134, 238, 297)。チベット語で「chos rje」。寺廟の教儀を主管し、読経の際に先導を務めた。「活佛」に次ぐ高位で、自己の衙門を有していた。『肅南裕固族自治県概況』p.34。この明海寺の安法台については、早稲田大学図書館所蔵の、中国科学院民族研究所 甘粛少数民族社会歴史調査組 編『裕固族專題調查報告滙集』(甘粛少数民族社会歴史調査組, 1963) —— 「内部資料/僅供参考」とある —— に所収の「裕固族地区的喇嘛教情況」に、極めて悪意に満ちた言及(引用は差し控えたい)があるが、史料批判が必要である。ちなみに、この『裕固族專題調查報告滙集』の巻頭の「説明」には、「本專題材料中の謬誤之处一定很多, 謹供同志們参考, 并希批評指正」とあるが、本書を改訂した調査報告が収録されている公刊文献、『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』における「裕固族的宗教和原始崇拜」には、明海寺の法台について、「郭法台、賀法台和安法台等幾任法台都是有学問的」とあり、安法台を、学問のある僧としてのみ記している。
- 12) 「羅漢」は西部裕固語で「ənehɾdan / ərgelun / ərgiləŋ」(『西部裕固漢詞典』 pp.21, 24, 25)。梵語の「arhat」。応供。
- 13) 「班第」は西部裕固語で「bandə」(『西部裕固漢詞典』 p.48)。梵語「vandyā」。新發意。
- 14) 「小頭頭」は西部裕固語で「ʃulengga」。『西部裕固漢詞典』 p.309 に「封建頭目制度中、最基層の事務人員」とある。范玉梅『裕固族』 p.28 を参照せよ。なお、オイラドでは、シュレンゲ šulengge は、サイサン ʃajisang、テムチ demči に次ぐ職掌で、「オトグ内で主に徴税の責を持ちながら、テムチを補佐した」(小沼孝博『清と中央アジア 遊牧民の世界から帝国の辺境へ』 東京大学出版会, 2014.7, p.39, n.44)。
- 15) ボブラ Bobur-a は、新疆出身のトルゴード・モンゴル人。射撃の名手で、カザフ追討に活躍。
- 16) 「黄番七族」のうちの一集団。
- 17) 無懷氏は道家が理想とする上古の帝王で、無為にして民を化したという。葛天氏は古伝説中の帝王で、教化を施さず世の中がよく治まったという。陶潜の「五柳先生伝」に、「無懷氏の民か、葛天氏の民か」とある。
- 18) 三山口は卯來泉山口、金佛寺山口、甘黄壩山口から成り、チベット人のドンナク mdung nag 部が居住。
- 19) 「黄番七族」のうちの一集団。五個家の黄ユグ

- ル人は、モンゴル系の東部裕固語を用いた。『裕固族簡史』 p.6; 范玉梅『裕固族』 pp.25-26; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」; 『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』 pp.4-5。
- 20) 「黄番七族」のうちの「八箇家」に由来。西八個家の黄ユグル人は西部裕固語を用いた。『裕固族簡史』 p.6; 范玉梅『裕固族』 p.25; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」; 『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』 p.4。
- 21) 「黄番七族」のうちの「羅爾家の黄ユグル人は東部裕固語を用いた。『裕固族簡史』 p.6; 范玉梅『裕固族』 p.26; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」; 『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』 pp.7-8。
- 22) 「黄番七族」のうちの「大頭目家の黄ユグル人は東部裕固語を用いた。『裕固族簡史』 p.6; 范玉梅『裕固族』 p.26; 佐口透「サリク=ウイグル族の歴史と社会」; 『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』 pp.6-7。
- 23) 原文は「先河」。『礼記』学記に、「三王の川を祭るや、皆、河を先にして海を後にす。或は源なり。或は委なり。此を之、本を務むと謂う」とあり、夏・殷・周の王は、海の源である河川(黄河)を、海より先に祭った。ここから転じ、「先河」とは、先に提唱する事物、さきがけを指す。

## 原文

凡例

- ・【 】内に校訂注および頁数を記す。
- ・原典では正字が用いられているが、ここでは、技術上の理由で、俗字を用いざるを得なかった漢字も少なくない。

【原典一〇一頁、集成528頁、文摘251頁】

## 哈薩克入甘續記 馬鈴榔

### ▼第一章【「第一章」文摘缺】

#### 哈薩克與蒙藏兩族之糾紛▲【▼～▲集成無】

★第一節【「第一節」集成作「一」】 東海子事件  
余撰哈薩克入甘記七章，附錄三章，所記述之事載止於中華民國三十年九月。轉瞬雙十節已過，▼余乃熨貼寒衣，安排暖閣，擬於公餘，▲【▼～▲集成脱】閉戸讀書。一日晴朗，坐對澗候所胡君送來之菊，遙望祁連之雪，雖無陶元亮「悠然」之佳趣，然暇暇以觀繕正之「記」及「附錄」，亦良好之時光也。適東海子頭目安立民之兄安立國至，余欣然延之上座，懇懃慰問曰：「地方平安乎？人民無恙乎？牲畜繁殖

乎」？此固向游牧人寒暄之例語也，不料觸動安立國之心事，蹙【「蹙」集成作「盛」】額而相告曰：「地方被哈匪擾亂，人民被哈匪屠殺，牲畜被哈匪掠奪，此東海子空前未有之慘禍也。」余聞之淒然。爰作哈薩克入甘續記，首【「首」集成作「着」】記東海子事件。☆【★~☆文摘無】

酒泉高台兩縣之間，有一游牧區域。其地東至高台黑泉附近，西至酒泉黃【「黃」集成脫】泥堡附近，北與高台鹽池雙井子等接壤，南與酒泉清水沙山毗連。東西約二百餘里，南北約百餘里。中有沙漠橫互，俗呼【「呼」集成作「乎」】曰：「回回沙窩」。★相傳古代戰爭，有回教徒避兵災於此，故名。沙窩者，流沙之俗名也☆【★~☆文摘無】。沙窩以西之地曰西海子，沙窩以東之地曰東海子。西海子地方有一湖泊，附近有寺曰蓮花寺，東海子地方【「地方」集成作「附近」】亦有一【「一」集成脫】湖泊，附近有寺曰明海寺。★故知兩地係以湖泊得名。（俗呼湖泊曰海子）☆【★~☆文摘無】

兩地所居之游牧人，俗呼曰黃番。★近因明改「番【「番」集成作「蕃」】稱「藏」，彼等行文皆自稱藏民，其語係維吾爾語，牧民☆【★~☆文摘作「彼此」】互相稱呼曰【「曰」文摘無】「錫喇畏吾兒【「兒」集成作「尔」】」。錫喇黃也，其義【「義」文摘作「意」】近於「黃回鶻」。★（按：回紇改稱回鶻【「回鶻」原作「回鶻兒」。集成に従う，自元明以來，譯曰畏吾兒【「畏吾兒」集成作「畏兀儿」】，最近新疆【「新疆」原作「疆」。集成に従う】當局譯曰維吾爾。）☆【★~☆文摘無】彼等【「等」文摘作「此」】之宗教及一切風俗與西藏人同【「與西藏人同」文摘作「與藏人相同」】，★祁連之藏族被稱為黑番，彼等另呼為【集成529頁】黃番，蓋【「蓋」集成作「僅」】亦有由。彼等自何時起牧於此地，史缺記載。然余從多方考之，知其梗概：彼等與酒泉黃泥堡一部份【「份」集成作「分」】居民同族。所不同者一耕一牧耳。耕者漸化為漢人之習俗☆【★~☆文摘無】。西海子【「子」文摘作「之」】牧民以「賀拉噶家」（小部落之名稱）為主，東海子牧民以亞拉噶家為主。東海子有牧民六十餘戶，西海子有牧民四十餘戶。「賀」「亞」兩族之正頭目皆居祁連山山地，兩海子係一草灘，留副【「副」文摘作「付」】頭目管領【「管領」文摘作「管理」】之。據彼等【「等」文摘作「此」】★（黃泥堡【原作「黃牛堡」。集成に従う】，兩海子，【原典一〇二頁】山地二部黃番）☆【★~☆文摘無】自述，明代自新疆東向，初居酒泉附近，逐漸向南山推進。明代於明海寺側建明海堡駐兵鎮撫，清代亦因之。迄今近城者（黃泥堡【原作「黃牛堡」。集成に従う】等地）業農；近農者漸知定牧；（兩海子地方）近山者仍【「仍」集成作「似」】為游牧。

★經多年之開導，民國二十八年西海子蓮花寺設一小學，由蒙藏委員會外差人員指導，受中央之補助。東海子亞拉噶家副頭目安立民願以全部落力量設蓮花寺小學第二部於明海寺▼側。三十年九月余與同人盧君參加此校第二部成立大會▲【▼~▲集成脫】。兩部落重要人物歡聚一堂。余贈聯語曰「開拓南北山而教育，造成東西海子人材。」期許甚深。不料相隔一月【「一月」集成作「一日」】，竟有一慘案發生，人事之不測，以至於此耶？☆【★~☆文摘無】

十月十五日【「十月十五日」集成作「十月五日」，文摘作「民二十九年十月十五日」】（陰曆【「陰曆」集成作「農曆」】八月二十五日）晨【「晨」文摘無】，★東海子民衆遙見【「見」集成作「兄」】哈薩克約四十人☆【★~☆文摘作「有哈薩克四十人」】，驅馬五十餘匹，自祁連山之榆木山奔出，竄至東海子明海寺東五里沙灘上停留不前。按諸當地【「當地」文摘無】舊例，★凡外來生客成羣入境，本地首領必派人前往查詢，從何來？到何處？有何目的？此亦盤詰奸宄【「盤詰奸宄」集成作「盤詰奸宄」】之意。二十九年冬馬鬃山一部分蒙古人受「華來喇嘛【「華來喇嘛」集成作「華米喇嘛」】」之慫恿，經過此地而東向，彼等前往查詢，受蒙民羊酒之款待，兩方歡洽，此次見有牧人遠來，彼等亦作如是觀☆【★~☆文摘無】。由明海寺就近派喇嘛五人民衆一人，前往詢問【「問」文摘作「門」】。並勸其遠徙。★至帳前觀之，始知非蒙民乃哈薩也。幸兩方語言略通，可以表達意見☆【★~☆文摘無】。哈薩【「哈薩」文摘作「哈薩克」】本自山中翹馬而【「而」集成無】逃竄者，恐藏民為官府偵探，★對彼或有不便，不然，無意間漏出消息亦對彼不利，乃謂六人：「他無所求，但為我作嚮導」。六人求回寺，哈薩不曰【「曰」集成脫】許，☆【★~☆文摘作「乃」】以綁票方式架走之。★寺中人見六人不返，知為哈匪所劫走☆【★~☆文摘無】，東海子【「子」文摘作「之」】牧人大驚，聚議於頭目家，十六日由安頭目立民偕明海寺住持【「住持」集成作「主持」】安法台率安才【「率安才」文摘無】等，共計【「共計」文摘無】【文摘252頁】十八人，向北跟蹤追【「跟蹤追」文摘作「追蹤」】之。中途追及。★彼等既不知分左右翼包圍，又不知分前鋒與後援【「援」集成作「鋒」】制敵，密集前行，渾無秩序，若平【「平」集成作「干」】日【「日」原作「曰」。集成に従う】之賽馬然。藏哈相隔【「隔」集成作「隅」】一箭之遠【「遠」集成作「地」】，遙見哈匪四十餘人，居高向下，前進又復中止，手中所持者惟挺與刃耳。依少年有為之安才意見：先放兩槍，（適藏民中僅有火藥二枝【「火藥二枝」集成作「大槍二支」】）威嚇敵人，如降必下馬來歸，如戰必槍刃相迎，勝負固未可預卜也。不料鬚髮【「鬚髮」集成作「鬢髮」】斑白之安法台以慈悲

爲懷，且恐激怒【「激怒」集成脱】哈匪傷其弟子。乃制止安才之行爲，自作先鋒，命藏民一律下馬，各☆【★～☆文摘無】出囊中錢財，婉言謂哈匪【「謂哈匪」文摘無】曰：「吾與爾平日無冤仇，爾欲前行，吾不害汝，請釋放吾弟子等【「等」文摘無】六人歸，吾將助汝路費。」哈薩聞之，★初無哀憐之意，但☆【★～☆文摘無】曰：「汝等同我向前行，到適當地點，我交還汝等之【「之」文摘無】六人」。★安法台信之，命從人尾隨☆【★～☆文摘無】，行至一四面有沙梁地帶【「地帶」文摘作「之帳幕地帶」】，★聞有小兒啼泣【「泣」集成作「哭」】聲，知已與帳幕相近☆【★～☆文摘無】，哈薩★肅衆入【「入」集成作「入」】，☆【★～☆文摘無】出其不意，奪其二火藥槍【「火藥槍」集成作「大藥槍」、文摘作「火槍」】，然後以繩分縛諸人【「分縛諸人」集成作「分結諸」】，剝其衣履【「履」集成作「屨」】。★安才掙扎欲逃，哈薩先以繩縊斃之。然後☆【★～☆文摘無】分別縊殺諸人【「諸人」文摘作「之」】，★恐其復甦，又分別以斧擊破諸人之腦，以沙掩其全身☆【★～☆文摘無】，★憐安法台年老，料其必死，未加斧劈之刑，日夕安法台甦醒，精神恍惚，至高台城報官☆【★～☆文摘無】「僅年老之法台未加斧劈之刑，沙掩全身，後蘇醒幸逃」。★事後查詢此縊殺【「殺」集成作「死」】之地，屬於金塔。在該縣東山「雙古城」東二十里，距縣城僅四十里。此地僅發現屍身十七具，知爲安頭目等殉難地☆【★～☆文摘無】。至於喇嘛【「喇嘛」文摘作「前喇嘛」】等六人，★已於十五日晚☆【★～☆文摘無】作「早已」被【原典一〇三頁】殺於夾山，★其地爲東海子北山亦即金塔南山也。此次事件東海子☆【★～☆文摘無】作「因而」死者凡二十三人★，其名稱如下：亞拉嗎家副頭目安立民，僧徒郭羅漢，郭小羅漢，楊班第，楊小班第，安班第，民衆安才，安應才，索福成，郭成祿，楊生元，楊老四，白天福，白天喜，白雪海，索成秀，白武興，郭老二，楊進才，安天保，白家四十八，安昌華，白小圈頭☆【★～☆文摘無】。代わりに文摘では、改行の後、第三節の冒頭部が挿入されている】。

### ★第二節【「第二節」集成作「二」】

#### 東海子事件之結束及其影響

東海子爲安靜之地，安立民等爲守分之人，禍從天降，不特藏族傷感，附近人士亦爲之惋惜。☆【★～☆文摘無】作「東海子事件發生后，」安立民之兄立國率代表★白武才郭成福等☆【★～☆文摘無】入酒泉域【「域」集成作「城」、文摘無】，分向騎兵第五【「第五」文摘無】師及第七區【「區」集成作「師區」、文摘無】行政專署報告，並請求救濟，發槍，追賊【「賊」集成作「藏」】，緝賊【「緝賊」文摘無】等項。甘省

府體恤邊民【「甘省府體恤邊民」集成作「甘肅省體恤邊民」、文摘作「甘省府」】共發救濟費國幣【「國幣」文摘無】四百六十元，★（每一死者家屬得領二十元。）☆【★～☆文摘無】至三十一年七月始將領款手續辦理清楚【「辦理清楚」文摘作「办清」】。發槍一事，雖藏民久【「久」集成作「欠」】未領得，然上方已有價發之意。三十一年十一月馬鬃山寶布拉殲滅哈匪【「殲滅哈匪」文摘作「殲哈薩」】二十二人，奪回駝【「駝」文摘作「駱駝」】七十五匹，並有其他物品。★七區專署判斷即東海子案之破獲。三十一年夏，安才之弟安玉因運羊毛西【「西」集成作「爲」】行，曾至該山親見奪回駝馬，皆非東海子原物，藏民等斷定此事或與東海子案無關。（詳後）☆【★～☆文摘無】。

★此事件已告結束，論其影響則有下列數【「數」集成作「極」】端：（一）☆【★～☆文摘無】作「自此，」哈薩【「哈薩」文摘作「哈薩克」】擾亂區域之【「之」文摘無】擴大。★前此劫殺案，☆【★～☆文摘無】作「過去」僅出現於玉【「玉」文摘作「酒」】安敦三縣及祁連山紅灣寺八個家一帶，今已延展【「展」集成作「伸」】至高台酒泉地方。由是【「是」集成作「此」】西至敦煌東至甘州皆其擾亂區域，甚而「金塔」「鼎新」亦發現案件矣。★（二）【「(二)」集成作「(2)」】藏民因遭禍而求進步。祁連北麓民日出而牧，日入而息，與外界頗少往來【「往來」集成作「來往」】，渾渾噩噩，恍若「無懷」「葛天」之民。經此二十三人慘殺案發生，軍事知識缺乏，不足以自衛，識字者太少，呈請呈報等公文，無人執筆，爲一小事而牽延數月；（例如：索還牲畜須造牲畜特徵冊，領款須各家具領條，此雖小事，安立國等往來城鄉數次，費時半半年，）現代常識太差，不足以應付新事件。凡此，皆一一暴露，自知非改進不足以圖生存。恰巧「西北幹部訓練團第一邊疆青年訓練班」暫設酒泉，班主任羅怒人教務長王德淦【「淦」集成作「金」】等皆熱心培植邊疆青年者，派員入山招收藏生，在往日未必有大量學生入城，此次例外，東海子頭目安立民之子安維嶽【「嶽」集成作「獄」】，安立國之子安維峻首先響應，西海子耆老之子郭懷成郭懷玉隨即附和，東海子願受訓學生二名【「名」集成作「人」】（註一）西海子學生八名。其他各族聞風嚮往【「往」集成作「應」】，計酒泉三山口東樂克部藏生馬生哲等三十九名，五個家藏生顧彥博【「博」集成作「情」】等三名，西八個家藏生讓才郎等四名，羅爾家藏生柴婁【「婁」集成作「婁」】嘉等【「等」集成脱】二名，大頭目家三名，亞拉嗎家柯【「柯」集成作「朝」】在雲等二名，賀耶嗎家四名，其他藏生八名，其【「其」集成作「共」】計藏民學生七十五名，開藏民【「藏民」集成作「藏民學生」】入城受訓之先河，雖曰【「曰」集成作「日」】主持教育【集成530頁】及協助招生諸君之力多，然求知自衛，出自

藏民之自覺，亦不可忽視。☆【★～☆文摘無】

★附註【「附註」集成作「注】一：因東海子新  
成立學校，學生留學校讀書，故入城受訓者反少。☆  
【★～☆文摘無】

〔付記〕 本史料の原文の入手には、中国社会科学  
院のホショード・チンゲル（青格力）qošud čengel  
氏、北京大学大学院生の張曉慧氏に、『邊塞集』の  
入手には、内モンゴル大学のナ・チョクト（納・  
朝克図）na.čoytu 氏にお世話いただいた。特に、  
チンゲル氏には、漢字で表記されたチベット語ア  
ンド（アムド Amdo）方言およびモンゴル語オイ  
ラド方言の人名の解釈についても貴重な御示教を  
賜わった。厚く御礼申し上げます。また、誤訳等が  
あるものと思われる。御指正いただくことができ  
れば幸いである。